

その八 烏来（ウライ）

モリ・P R・コーポレーションと業務提携する台湾の広告会社から国際電話がかかってきた。台北市の南にある山中の観光地烏来ウライに待望の雨が降るらしい。元々雨が多いが冬という事もあつてか、今年は晴天が続いていた。すぐさま在日台湾人の女性モデルに大阪空港まで来るよう連絡する。しかし、一緒に出張するはずの守モリが出社しない。

大阪万国博覧会以来ヨーロッパでは東洋に関心が集まっていた。太平洋戦争で敗北してから、わずか四半世紀で復活した姿を博覧会でアピールした日本にヨーロッパ諸国が驚いた。そして日本を含む東洋のエキゾチックさに魅了された。

一ヶ月ほど前にその魅力をヨーロッパで紹介したいと、日本びいきのフランスのテレビ局からの依頼があつた。もちろん、モリ・P Rだけでなく数社に依頼があつた。非常に重要な案件だ。様々な情報から守モリは日本ではなく台湾の烏来を撮影地に選んだ。

「心の旅」シリーズで収集した情報を駆使しても国内にそれなりの場所が見当たらない。高度成長に目を奪われ公害にむしばまれる日本に神エキゾチック 秘的などころがないのかも知れない。しかも神秘性を表現するのは非常に難しい。いい加減な仕事はできない。「これは」という写真が撮れなければそれまで。しかも将来の業績に大きな影響を与えるかも知れない。

電話が鳴る。守^{キリ}からだ。

「社長が倒れた。今、検査中。すまないが……」

「一寸待ってくれ。俺一人でこなせる仕事やない」

「いや、できる。年度末が近いから誰も手一杯。台北のスタッフを使ってくれ。予算はケチらない」

「荷が重すぎる」

「二世……」と、守^{キリ}が一旦言葉を切ってから低い声で続ける。

「……もう、お宅はプロや」

信頼されていると言おうか、ここはどうかしななければと腹をくくる。

「なんとかやってみる」

チャンスなのかも知れない。やる気がこみ上げる。

最近守^{キリ}は「親父」と言わずに「社長」と呼ぶ。会社を継ぐ自覚が日増しに強くなっている。

*

日本では雪の季節なのに、松山（台北）空港に降りた時、ムツとする湿気と暑さには驚いた。南国と言うより日本の梅雨を彷彿させる不快さを感じる。

台北の広告会社のスタッフが出迎えに来てくれた。しかし、守^{キリ}の姿がないので不思議がる。「守^{キリ}先生は？」

機内でモデルに説明していたから黙っていた。不安そうな視線が俺に向けられる。とりあえず用立てしてくれた車に乗り込む。右側通行とは聞いていたが、運転が荒いのか、驚くというより怖かった。それでも初めての海外出張だから窓から首を出さんばかりに観察した。そして又々驚いた。同乗するモデルのスタイルがいいのはともかく街を歩く若い女性に誰一人、大根がない。長くて細い。

驚いてばかりでは仕事にならない。興味本位の観察はほどほどに時差修正した腕時計を見ながらホテルに向かう。今度の仕事は難しい。モデルやスタッフとの連携が重要になる。ホテルに入ると夕食には早かったが、レストランで綿密に撮影の打ち合わせをして問題点を何度も洗い直した。もちろんアルコール抜きだ。

俺の腕が通用するかが最大の問題だ。しかも元々二人で撮影する予定が一人になったので持ち込んだ機材も半分になった。そこで「俺が責任を持つ」とハッターを打つ。そう、俺の武器と言えば「ハッター」しかない。予算制限がないからハッターを補強するために用意しておいた茶封筒を配った。

長い夕食を終えてそれぞれの部屋に戻った後、カメラの動作確認とフィルム感度設定を念入りに確認する。明日は早い。

*

数台の車に分乗して烏来トロッコ駅にたどり着く。ここまで来るとさすがに肌寒い。機材を

トロッコに積み込む。平日の早朝、しかも雨天のせいかな観光客はいない。ある意味、条件がいい。晴れていれば平日でも日本人観光客が多いらしい。それに湿度が高いほど霧が発生しやすい。摩周湖のような霧はNAGだが、この霧はそうではなさそうだ。

トロッコを降りると真正面に烏来瀑布^{ウライバグ}が見える。幅は広く落差も大きい——見事の一言に尽きる。そんな滝をロープウェイに乗り換えて上から眺める。大量の水が落ちる様がスローモーションのように見える。すごい迫力だ。カメラに収めたいけれど固定窓なので真下を撮影できない。

ロープウェイを降りるとスタッフが「もうすぐです」とにこやかに言うが、目の前には急峻な道が続いている。背負った重い荷物——特にバッテリーと発電機が重い、誰もが黙って登る。俺もカメラや三脚を持つが重さが違う。一緒に歩いていたモデルもそれなりの荷物を持っている。

「台湾人は辛抱強い。心配いりません」

モデルの言葉に元気をもらう。滑る坂道を登り切ったところで一息つきながら耳を澄ませる。いつの間にか烏来瀑布の音が聞こえなくなっていた。

「到着しました。準備に一時間は必要。急ぎましょう」

いつの間にかモデルとメイク係や振付係がいなくなった。今回、着替えやメイクに時間がかかることは十分承知している。撮影機材の準備も同じ。スタッフも照明器具やレフ板の配置に

かかる。俺も数カ所に三脚を立てて露出計やフィルターをチェックする。更に長尺フィルムとモータードライブのバッテリーを再確認する。

念入りに周りを見渡す。意外と足元すぐ先に池がある。視線を奥に移動させる。池は透き通っているようにも濁っているようにも見える。大量の水が落下する烏来瀑布が下流にあるのに碧色の水はまったく動かない。漂う事すら禁じられているかのようだ。さらに雨の滴シズクさえ輪を作る事なく池に吸い込まれる。霧のせいかもしれない。

薄い霧が池のわずか上を這うようにゆっくりと流れる。霧の濃淡が池に浮かぶ中島を幻想的に見せる。中島には白い六本の柱に支えられた赤い尖った屋根を持つ建物がある。その建物の手前には屋根の赤さとは微妙に色合いが異なる赤い反橋ソリバシが架かっている。

ここはまるで桃花扇トウカセンの物語に出てくるような山中の庭園だ。摩周湖と違って妖気を感じる。俺はただ立っている。片足は池に捕らえられて動けない。しかし、冷たくはない。冷たいのは霧の隙間を縫うように張り巡らされた光の方だ。それは影を造らない光でまるで点の集合体のように見える。

セザンヌやスーラの絵を思い出す。点描画の天才たちの描いた光が目の前にある。一つ一つの光が霧に流れ込むと濡れたような輝きを放つ。しかし、影はない。影がないからすべて動かずにじっとしている。いや、動けないのだ。動けないから隠れることも浮かび上がることもできない。

セザンヌらがフランスの画家であることに気付く。フランスのテレビ局が東洋の神秘に興味を持った理由が何となく分かった。

今、幅十メートルほど、長さは無限の反物タシモノのような霧が流れている。赤い反橋ソリバシの上をゆつくりと通過する。

反橋の頂点に鋭い視線を持つ若い女の姿が浮かび上がる。女は流れてきた霧を白いベールのように身にまとう。流れが止まり女の視線から力が抜けると何もかもが透き通る。胸の膨らみは白く、静かに浮かび上がり、白い雫を落とす。足首から太ももまでがゆつくりと回転し始めると遅れて上半身も回転する。そして胸や腰が霧に吸収されるように薄くなって長い黒髪が扇状に拡がると見えなくなる。

再び摩周湖の霧を思い出す。本当の神秘とはこういうものなのかと実感する。あつという間に撮影は終了した。感動と興奮の連続に酔い潰れてしまった。

*

持ってきたフィルムはもちろん、スタツフが用意した予備フィルムも使い果たした。モータードライブを併用したので何回シャッターを切ったのか覚えていない。しかし、モデルとスタツフは完璧にリクエストに応えてくれたし支えてくれた。感謝、感激以外の何物でもない。

さて雨の中で二時間もヌードになっていたモデルは体調を崩したらしく鼻をズルズルさせる。興奮めと言えばそれまでだが、色白のあの細い身体にどんなエネルギーが詰まっているの

かと感心する。

もちろん個人的には関心がない。モデルはモデル。仕事は仕事。モデルだから美人で抜群のプロポーション。指示通りのポーズを取ってくれた。いや、指示したと言うよりは刻々と変化するまわりつく雰囲気と同調して素晴らしいポーズを次々と決めてくれた。

しばらくして彼女のエキゾチックな魅力がフランスで認められて押しも押されもせぬトップモデルになった。ところが俺は三流のまま。しかし、そんな彼女と一緒に仕事ができたのは幸運だった。

ところでこのモデルより美英子に魅力を感じるのは何故なんだろう。夏子もこのモデル以上にスタイルがいい。

帰国フライトまで時間があつたのでショッピングする事にした。本来ならスタッフに頼むのが筋だが、風邪気味にもかかわらずモデルが快く引き受けてくれた。

そうなるを買うものはふたつ。ひとつはモデルへのお礼。もう一つは美英子への……もう少ししたら誕生日が来るからバースデー・プレゼント。

「二世君とやったら安心やわ」と、言われて以来、電話していかない。もちろん何の音沙汰もない。希薄な付き合いだから気にしないが、あまりにも消極的だった俺に愛想を尽かしたのかも知れない。もう手遅れかも知れないが何か切っ掛けを……でも名案が浮かばない。

そんな時に今回の台湾での仕事……珍しいものをプレゼントして気を引こうと考えた。果た

してどうだろうか。

「誕生日にプレゼントしたいもんがある」

てな具合に誘い出してバカバカしい話をしながら……と夢想到浸っていると目の前でモデルが首を傾げている。

「何をニヤニヤしてるんですか」

ハッと我に返る。

*

今、下町の宝石店のショーウィンドーを眺める。宝石店と言ってもパツと見いは間口の狭い雑貨店でいささか怪しい雰囲気漂う。モデルのレクチャーがあるものの不安を感じる。

三センチほどのハート型の宝石に引かれる。モデルによると台湾でしか採れない赤い線が入った珍しい翡翠ヒスイだと言う。宝石のことはまったく知らないが多分酸化鉄でも混入したのでは……それに石英とか雲母が混じっているのか、きらめいている。女心を引きつけるのに十分な魅力を持つている……と勝手に考えた。

値札を見ると大ききの割には驚くような値段ではない。大胆になるのは外国にいるからかも知れない。台湾圓で二千圓。日本円で二万円ほど。為替レート感覚が麻痺しているせいかな、高いとは思わなかった。

——「独断と実行のその日暮らし」。値切れば何とかなる

ドアを開ける。先ほどの宝石を指さす。まずモデルが先陣を切る。俺も大阪弁で騒音的な声を上げる。これが台湾での買い物テクニクだと事前に聞いていたが、少しやり過ぎたかも知れない。

すぐ半値になった。ここで首を縦に振ってはダメと助言されていたので踏ん張る。

「二つ買うから、まけてくれ」

「ペンダントにして豪華ケースをつけるから、まけられない」

モデルが「ケースはいるのか」と囁く。

「ひとつはアナタへの感謝を込めてのプレゼント。もう一つは恋人へのバースデー・プレゼント」

モデルが感激して俺を見つめる。

「私はケース、いらぬ。恋人のために頑張ります！」

モデルはイメージが狂うほどの勢いで値切る。もちろん俺も頑張る。すると更に半額になった。つまり四分の一になった。それでも店長に何か余裕がある。純金ではないだろうが、細い金色のチェーンに宝石を通してペンダントにする。それを受け取ってモデルの首につける。さすがにモデル。宝石が引き立つ。

「似合うなあ」

モデルはうれしそうに宝石をつまむ。いい雰囲気になったのに店長が無粋な言葉^{アブサイ}を吐く。

「日本人でも大阪人の値切り、きつい」

日本語が堪能なのは分かるが大阪弁まで分かるのか。「値切つてない」と言いたかったが、財布から札を出すと店長が「おおきに」と答える。そしてケースをふたつくれた。無粋だと思つたが親切だった。とんだ値段交渉だったが、何かさわやかな気持ちになつた。

仕事は終わった。モデルは次の仕事のため台湾に残るといふ。それでも空港まで送つてくれた。

「楽しいお仕事でした。守^{キリ}先生によるしくお伝えください。また、仕事、ください。今度は夏の仕事をください」

お互い大笑いした後、握手して別れた。フィルムバッグには撮影済みのポジフィルムが二本、長尺フィルム缶が十缶見える。撮つた写真には自信がある。しかし、俺の腕ではなくモデルとスタッフのお陰だった。

一方、フィルムの横にケースが見える。こちらの方は……自信がない。